



# 日動労千葉

国鉄千葉動力車労働組合

〒260-0017 千葉市中央区要町2番8号(DC会館)

電話 (鉄電) 千葉2935・2939番  
(公) 043(222)7207番  
FAX 043(224)7197番

2000.9.1 No 5188

## 4党合意にとどめを

## 国労臨大と国鉄闘争の展望

### 闘争団・家族の渾身の決起は

# 労働運動再生への突破口 ひらく歴史的快挙だ!

### 闘争団渾身の決起

8月26日の国労臨時続開大会は、闘争団・家族を先頭とした国労組合員、支援の仲間たち三〇〇名が会場前をうめ尽くす状況のなかで開催された。

闘争団は臨大に先立って、8月20日から上京行動に入り、「国労本部の不誠実な態度に抗議し、続開大会の中止を求めるアピール」を発して、本部への申し入れや抗議行動など、四党合意粉碎に向けた連日連夜の闘いに起ちあがったこの闘いは、続開大会の開催をゴリおししようとする国労本部を決定的に追いつめた。

とくに大会前日の25日は、闘争団・家族、組合、支援労組の仲間たちが国労本部に結集し、本部執行部との激しい議論がつづいた。深夜に至って本部は、(1)執行部は総辞職する、(2)四党合意は採択せず、全組合員の一票投票を行う、との見解を表明した。

だが、あくまでも続開大会の中止と四党合意の撤回を求める闘争団と本部見解は激しく対立した。続開大会は、こうした状況のなかで開催された。

### 「総辞職」覆し、一票投票を実施

闘争団・家族の渾身の決起は、7・1臨大につづき、再び四党合意の採択を阻止した。だが続開大会では、「執行部は総辞職する」という前日の確約は破棄され、四党合意を全組合員の一票投票にかけるといふ方針が提起され、10分ほどの委員長あいさつだけで、それが一方的におし通された。

言うまでもなく、一〇四七名闘争をつぶし、国労の組織そのものを崩壊させることを目的とした四党合意を一票投票にかけること自体が決定的な誤りであり、国家権力による支配介入を容認し、自らを辱める行為だ。

闘争団や組合員の怒りの声の前に立往生しながら、組合規約にもない一票投票などというやり方で、あくまでも四党合意をおし闘争とする姿勢は、断じて許されるものではない。

### 歴史的な快挙!

闘争団を先頭としたこの間の決起は、支配権力の大陰謀をはね返

し、深刻な組織的困難をのりこえて、勝利への新たな土台を築こうとしている。その怒りの決起は二度にわたる臨大での採決を阻止し、執行部を総辞職寸前の状態に追い込み、闘う労働組合としての国労を守りぬいたのだ。

またこの必死の決起は、労働運動全体の階級的再生への可能性をこじ開けたと言っても過言ではない快挙である。

国労本部、チャレンジグループや革同多数派は臨大に機動隊を導入し、闘争団を「暴徒」と呼んで非難し、怒りの声を力でおし潰そうとしたが、闘争団と家族はひるむことなく毅然と立ち向かった。全員の労働者に必死で支援を訴え、臨大会場を怒りの声で包囲し、演壇にかけあがり、国労本部に徹夜でつめかけ、力の限りを尽くして3カ月にわたる闘いを貫徹して敵の攻撃をはね返したのだ。

そのみならずこの決起は、労働運動全体に大きな衝撃と波紋を広げ、連合傘下からの叛乱はもとより、全労連大会、全労協大会などで本部方針をつき動かし、労働運動を二分する闘いとなって燃えひろがった。

### 労働運動再生への可能性を開く

戦後の労働運動の歴史をみても、このような形で現場の労働者が勝利した経験は希有なことだ。四党合意をめぐって起きた衝突は、表面的には国労という労働組合の内部における路線対立のように見えるが、その本質は、階級的労働運動を根絶しようという攻撃と、闘う労働運動を再生しようとする闘争者の非和解的な衝突であった。

労働運動の指導部がことごとく体制側の手先と化し、労働運動全体が全く無力になっている状況に對して、現場の労働者が激しく抵抗し、そうした激しい分岐のなかから労働運動の戦線的再生の可能性が大きくこじあけらようとして



いるのだ。ここには、21世紀に向けた労働運動再生への展望が象徴的に示されている。

いま国労に求められているのは、この間の攻防戦で発揮されたすばらしい力を闘う執行部の確立に向けて集約していくことだ。

この間国労本部は「政治解決路線」にのめり込み、自らを嘆願者の地位におとしめ、悪循環のような後退を繰り返してきたのだ。その結果行き着いたのが四党合意であった。いまこそ、この路線的誤りをたち切って闘う執行部を確立し、原則に返って再出発しなければならぬ。

## 四党合意に断を

われわれは、一〇四七名の一員として、全国の仲間とともに全力で闘いに立ちあがる決意だ。何よりも、四党合意を最終的に断を下し、逆にこれを反撃への転機とするために全力を尽くそう。

とくに一票投票の過程は、国労のみならず、全ての国鉄労働者にとって、確固たる路線・方針を再確立し、強固な団結を築きあげる決定的に重要なときとなる。国労のなかからも、運輸省・自民党・JRを不当労働行為の当事者とした新たな地労委闘争を開始されている。全職場での議論をまきおこし四党合意を粉砕しよう。

この間の闘いに決定的なダメージを受け、困り果てているのは敵の側だ。われわれは、敵の弱点・破たん点に向けて全力で闘いを挑めば必ず勝利の展望は開けると確信している。運輸省は、JR法の

改訂JRの完全民営化を目論んでいるが、一〇四七名闘争が未解決のまま完全民営化などできるはずはない。またJR貨物・三島の経営破たん、安全の崩壊など、JR体制は深刻な矛盾に噴出させている。

とくに、JR体制の最大の矛盾点は、JR総連・革マルとJRとの結託体制だ。いまその結託体制の崩壊がはじまろうとしている。JRにおける力関係を逆転させる大きなチャンスを迎えているのだ。いまこそ、JR総連解体・組織拡大の闘いに本格的に立ちあがろう。

## 闘う労働運動再生への転機に！

またわれわれは、全国の仲間たちに新たな呼びかけを発したいと考えている。国労闘争団のみならず、全国の無数の労働者、労働組合が四党合意めぐる攻防の過程で重大な決断をし、飛躍し、新たな一步を踏みだして、労働運動の現状を揺るがしはじめている。われわれは、国鉄労働者自身が、苦闘する全国の労働者の先頭に立ち、攻撃の矢面にたつて怒りの声を組織し、その結集軸となる決意を固めたとき、情勢は必ず動くと確信している。

ILOの最終勧告という情勢も含め、国鉄闘争は、勝利への大きな地平をきりひらきつつある。一四党合意に最終的な断を下そう。一〇四七名の解雇撤回に向けて、国鉄闘争の再出発をかちとろう！



8・22集会での動労千葉闘争団  
中村俊六郎さんの発言要旨

一〇四七名の解雇撤回闘争は、「四党合意」をめぐる重大な岐路に直面しています。国労本部は、七月一日の国労臨大での闘争団・家族の必死の叫びを「暴力行為」と呼び、避難を繰り返す中、闘争団・家族や組合員の抗議の声を踏みにじって八月二六日に続開大会を開こうとしています。しかし、こうしたやり方は、団結のひびをさらに拡大するものであり、労働組合としては絶対にやってはならないものです。

国労臨大での闘争団・家族の悲痛な叫び声、「演壇占拠」は国労闘争団自らの尊厳をかけた全く当然の行動であり国労の闘う団結を守り抜く闘いでした。さらには、日本の労働運動の未来にとってはかり知れない意味を持つすばらしい決起であったことは間違いありません。

わたしは、一〇四七名の一員として国労闘争団・家族のこの決起を心から支持し、ともに勝利の日まで闘い抜く決意です。今、七月一日の臨大での闘争団・家族の闘いにより、一番打撃を受けているのは、自民党であり、JRであり、「四党合意」を推進する連中であることははっきりしています。そういう意味で、一〇四七名闘争に今真に求められているのは、この困難を産みの苦しみとして、より鍛えられた新たな団結と戦列を創り上げることです。労働組合の自主性を放棄して政府与党に順することではなく、われわれの闘いが生み出した宝として一〇四七名を守り、組合員の団結に依拠して闘い抜くことではないでしょうか。

われわれ動労千葉は、団結を更に打ち固めてJRとの闘いを強化し、そして、JR総連解体・組織拡大の闘いを強化するとともに、本日集会に参加した皆さんや物心両面にわたって闘いを支えてくれている全国の皆さんとともに、一〇四七名の解雇撤回まで闘い抜く決意を明らかにして、動労千葉争議団を代表しての決意表明にします。